

多様な授業形態を設定する教室の現状とその考察

佐藤 美保子^a

^a 湘北短期大学非常勤講師

【抄録】

本稿では、アクティブラーニングが可能な本学 133 教室の空間利用状況の調査結果から、教室の使い方と授業運営方法を考察した。その結果、学習活動には教室の使い方が影響していると考えられた。

今後の授業運営と研究について、考える機会とした。

【キーワード】

アクティブラーニング 学習活動 教室

1. はじめに

筆者は今まで、本学の特色ある教室の複数の設計・デザインに関わってきた。また、生活プロデュース学科に所属する非常勤講師として『創作絵本の制作』の授業を2年間担当してアクティブラーニングを取り入れた授業を行っている。本稿では、教員や学生が、教室をどう使いこなしているのか、どんな工夫があるのか、利用実態の調査をもとに空間的視点から分析する。そのうえで、将来的に筆者がこの教室で授業を行うとしたら、どのような授業運営（学習活動）が出来るのかを考える機会とし、今後の教育や授業展開に活かすものとする。

なお、文部科学省ではアクティブラーニングに

ついて次のように述べている。『教員による一方向的な講義形式とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学ぶことによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等を行うことでも取り入れられる。』¹⁾ 本稿において「アクティブラーニング」という用語を用いるときの意味も、これに準じている。

2. 問題の所在・研究の方法

本論文の目的は、アクティブラーニングが可能な本学 133 教室（ワークショップ演習室）の、使い方と授業運営方法を、学習活動を通して考察していくことである。大学教育は知識伝達型からア

<連絡先>

佐藤 美保子 mihoko@shohoku.ac.jp

クティブラーニング型授業へ移行が必要だと主張されている。²⁾ そのような中で、湘北短期大学においても学生による主体的な学習活動を促す教室環境の整備を行ってきた。

今回は、筆者が設計・デザインに関わった中でアクティブラーニング型の授業が行いやすい、可動タイプ島型の、133教室(ワークショップ演習室)に注目し、調査と考察を行う。使用頻度の高い4つの授業で、どのようにアクティブラーニングを取り入れているのかを、各担当の教員に空間的視点からヒアリング調査を行った。調査した期間は、2018年5月から12月までである。

はじめに、教室が当初の設計コンセプト(学科からの要望)の通りに使われているのか否かをベースに、授業における空間利用状況を事例として掲示しながら、4つの授業の共通点・相違点を分析していく。

次に、分析した結果から、設計者として想定していた通りだったのか否か、新たな発見や問題点があるのか、実態を報告する。

最後は、教員としての視点も踏まえて、発見したものを、考えられる新しい視点や課題を分析した上で、今後の教育や授業展開に活かせる空間づくりについて、まとめていく。

3. 133教室(ワークショップ演習室)の特徴と授業での活用事例

3-1. 特徴

はじめに、133教室がどのような教室であるのかを解説する。

133教室は、生活プロデュース学科で長年「食物学実験室」として使われてきたが、老朽化と使用目的の変更にともない、“ワークショップを行うことが出来る教室を”、という学科からの要望により、2016年3月に改装をした。133教室を使って定期的に授業を行う予定の教員からは、下記のような詳細な要望を受け、それに対して筆者は次の様な提案をした。(図1、図2、図3)

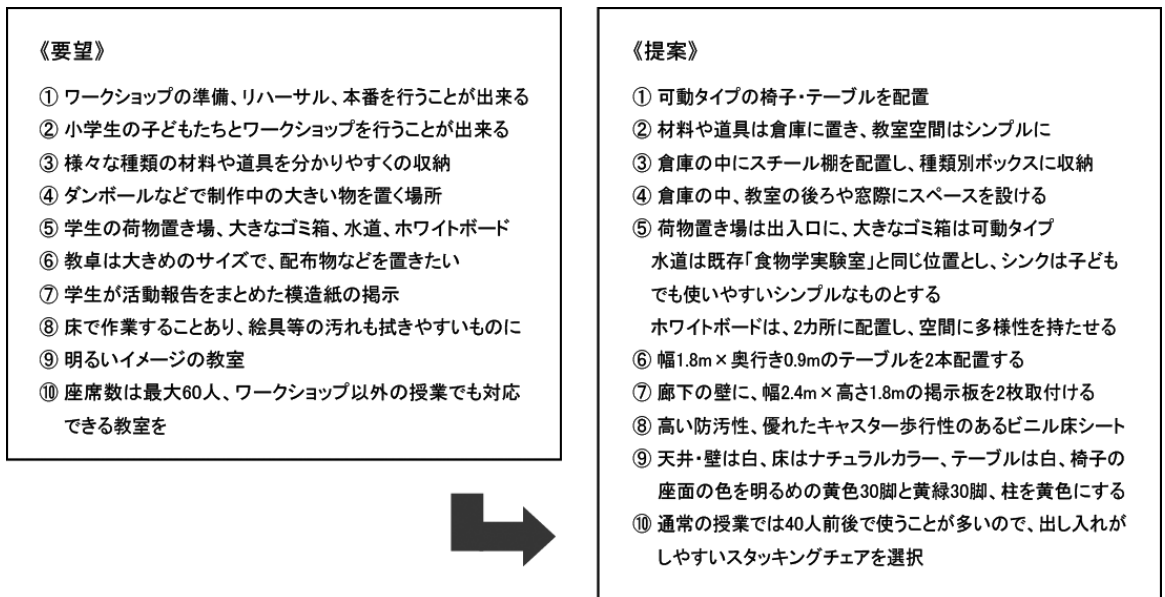


図1 要望と提案

多様な授業形態を設定する教室の現状とその考察

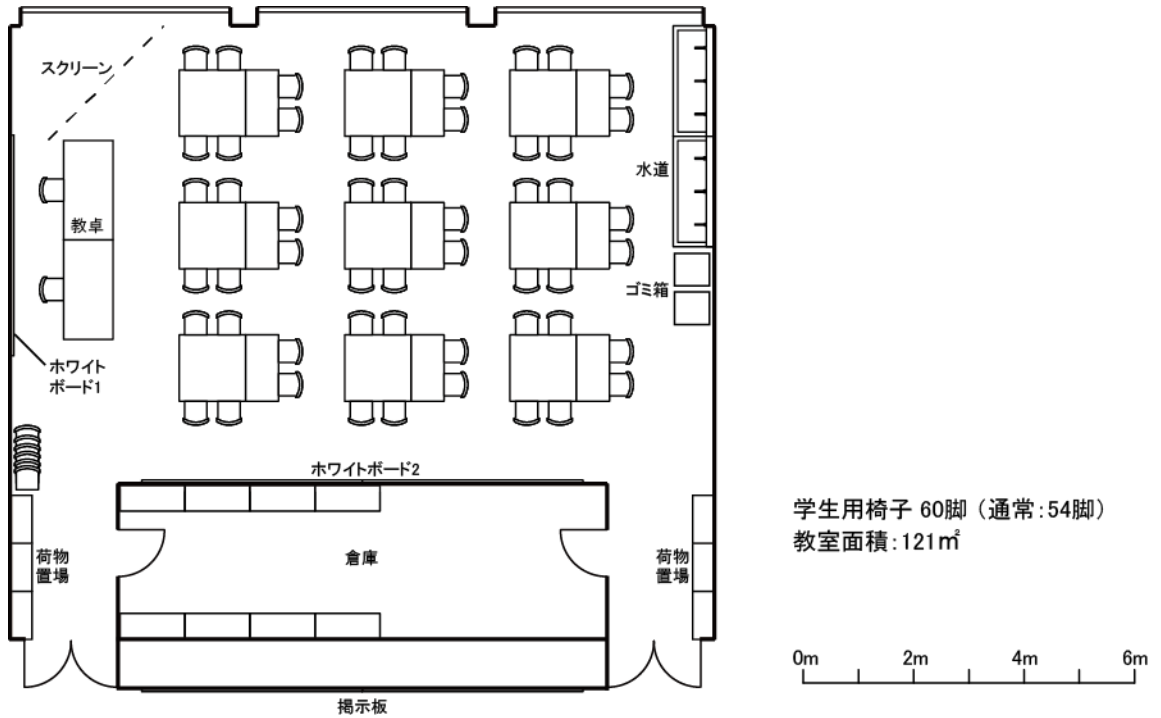


図2 133教室平面図

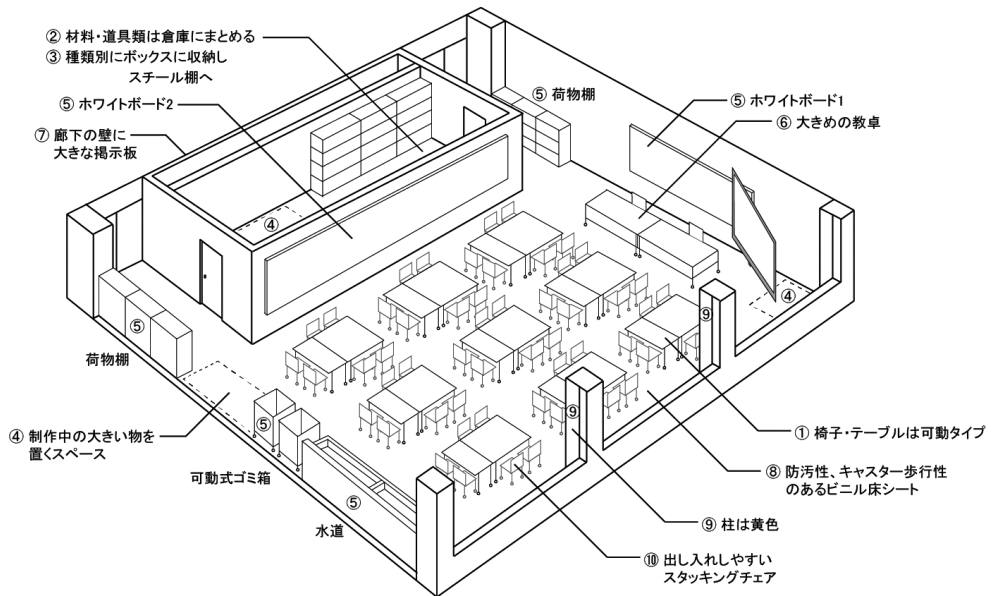


図3 133教室イメージパース

3-2. 活用事例

～授業場面にみる 133 教室の使われ方～

教室が完成してから3年が経とうとしている中で、133教室の使用頻度の高い4つの授業『子どものワークショップ演習Ⅰ』、『子どもの食生活』、『インターンシップリテラシー』、『キッズスペース論』の空間利用状況をまとめていく。『子どものワークショップ演習Ⅰ』は133教室を使用する演習系授業の中で、特に動きのある授業である。筆者も、この授業の担当の1人であることから、詳しく調査することができた。

【授業例1】：「子どものワークショップ演習Ⅰ」

(1年生後期、演習科目、受講者数35名)

この授業は、子どもたちと一緒に行うワークショップを企画・実践する授業である。授業の一般的な流れは、始めに配布物を教卓から取り、各チームの作業ボックスを倉庫から取り出し学習活動に移るといものである。授業は、話し合い、制作、検討、PC作業、リハーサル、と進んで行く。教室内に設置された倉庫(材料・道具置き場)、さらに教室外側の掲示板まで、動きの場は広がり、教室の様々な使い方を見ることができた。

図4-1は、4グループ(1グループ8～9名)に分かれた学生たちの動きをまとめたもので、話し合い時の空間利用状況である。それぞれのチームで、ワークショップで行ってみたい内容を話し

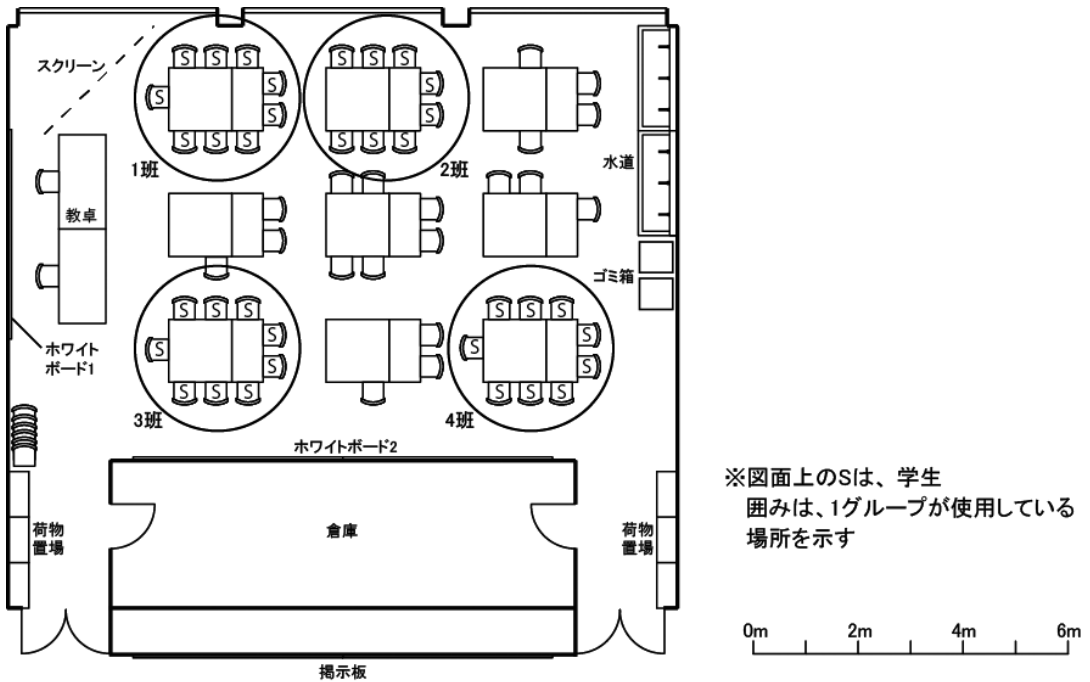


図4-1 授業「子どものワークショップ演習Ⅰ」の空間利用状況（話し合い時）

多様な授業形態を設定する教室の現状とその考察

合い、配布した用紙に書き出し、発表するという時のもの。“話し合い”となると学生は自然と椅子を移動し、ひとつの島にチーム全員が集まる。チームリーダーや、リーダーではない学生がどのように活動しているのか、この段階から学生1人ひとりの個性が見え始める。

次に、図4-2は制作時の空間利用状況を示したものである。1チーム8～9人ではあるが、実際の制作に入ると、二手に分かれることが多い。1チームが二手に分かれ4～5人での活動になると、さらに1人ひとりの個性が顕われてくる。教室空間に余白（席の空きスペースや、座席周辺の空きスペース）があることで、教員は全体的に学生の活動を見ることができ、学生も自然とからだの動きを伴っていることが分かる。制作の中では、ワー

クショップでどのような物を作るのか、どのくらいの時間が掛かるのか、試作・検討をし、作り方の手順をパソコンを使ってまとめていく。制作に入ると、キャスター付きの大きめのゴミ箱2つは使い勝手が良く、制作物によっては、水道が必要な場面も出てくるので、教室内に水道があることも便利である。また、共通で使う道具や材料が中央のテーブルに自然と、又は自主的に置かれることもあり、どのチームからも取りやすい状況を作ることが出来る。さらに、ワークショップの内容が決まると、ホワイトボード2には当日のスケジュールや、準備するもの、次回行うことなどを学生や教員が掲示、書込みをしている。

次の図4-3は、更に制作が進み、教室の一部では、司会進行チームが当日の動きやアイスブレイクの

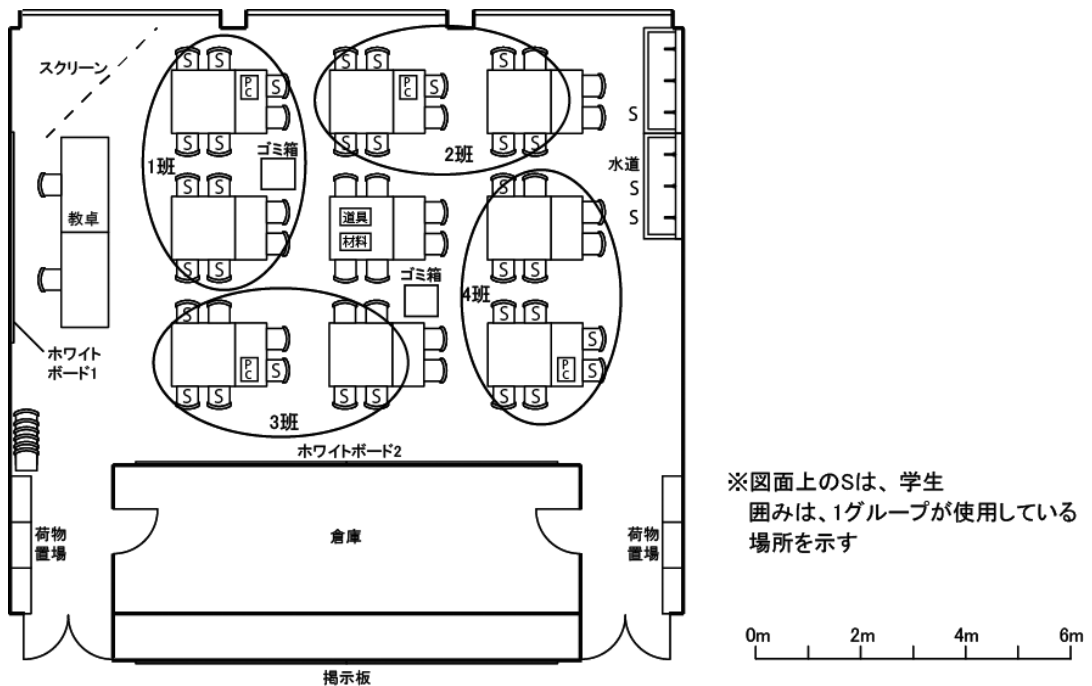


図4-2 授業「子どものワークショップ演習Ⅰ」の空間利用状況（制作時）

検討を行っているところである。その時の状況によって、教員も学生も、可動テーブルと椅子を上手く動かしながら学習活動を進めている場面も多くある。

ここまでに図示した空間利用状況は、授業の進捗によって変化し、表れた、ある瞬間をとらえたものだが、この他には、図44で示したように、空間をダイナミックに使用する場面もある。各チームがダンボールで大きな制作物に取り掛かる時には、テーブル面で細かい作業をする学生と、床面を使って組立てて行く学生とに、自然と役割分担をして作業をしている。筆者は133教室改装の際、学科からの要望に対して設計者として学習活動を想像し提案したが、これまでの場면을教員として見たことで、学習活動には教室の使い方が影響していることを感じた。

もちろん教室とは、1つの授業だけでなく、いくつもの授業に対応できる空間となっている必要がある。133教室は、“ワークショップを行うことが出来る教室”という特徴を持つ中で、「子どものワークショップ演習1」のような常に動きのある演習系授業だけでなく、グループディスカッションが主となる演習系授業や、講義系授業の中でのアクティブラーニングではどのような空間の使い方がされているのか、他の3つの授業で分析していく。

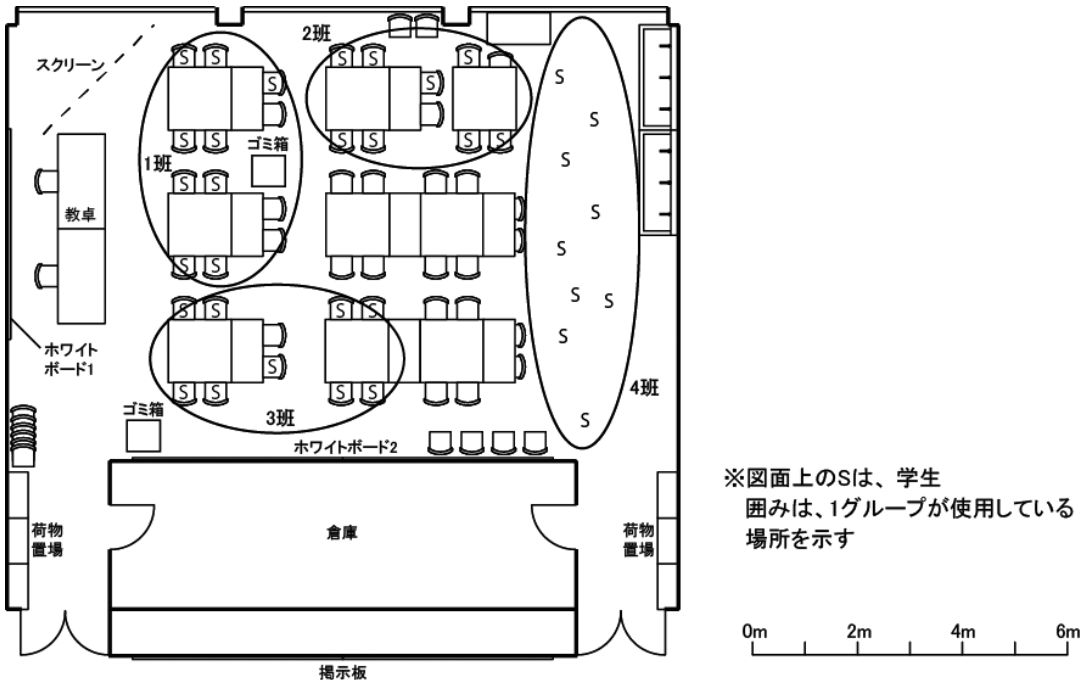


図4-3 授業「子どものワークショップ演習I」の空間利用状況（制作・検討時）

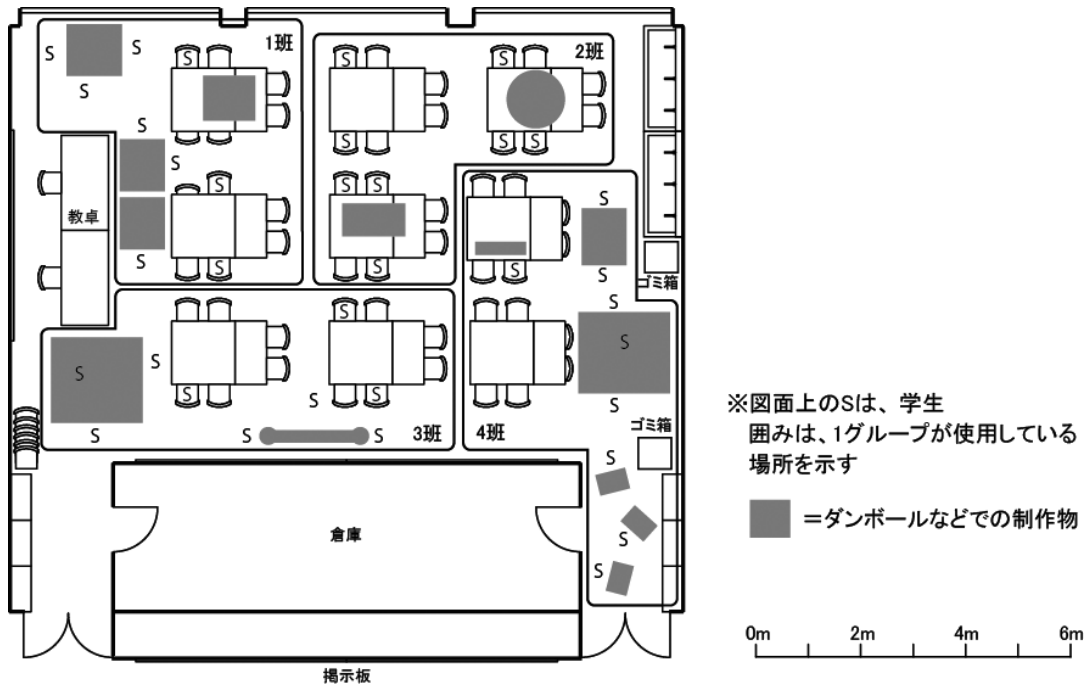


図 4-4 授業「子どものワークショップ演習 I」の空間利用状況（ダンボールなどでの大物制作時）

【授業例 2】：「子どもの食生活」
 (2 年生前期、講義・演習科目、受講者数 30 名)

この授業は、子どもの発達段階における食生活について学び、調理法などを講義・実習を通して学んでいく。その中での数回は、133 教室でグループワークを行うことがある。図 5 は、その時の空間利用状況。6 チーム（1 チーム 5 名）に分かれて授業を受けている時の様子である。広い教卓には配布物を並べることが出来るので使い勝手が良い。スクリーンに資料を映し出し講義を行った後、グループ作業に入る。話し合い、グループごとの制作物、PC 作業、発表までを行うが、PC 作業はパソコン教室で行っている。この授業では、調理

実習室、133 教室、パソコン教室を授業の内容によって使い分けていた。

【授業例 3】：「インターンシップリテラシー」
 (1 年生後期、演習科目、受講者数 54 名)

この授業はインターンシップの事前学習で、生活プロデュース学科と他学科の合同授業である。グループワークやロールプレイング等を取り入れており、9 チーム（1 チーム 5、6 人）に分かれて行っている。図 6 は、その時の空間利用状況である。授業の流れは、スクリーンに資料を映し出し講義を行った後問題を提示しグループディスカッションに入るが、全島を埋めるように学生が入る

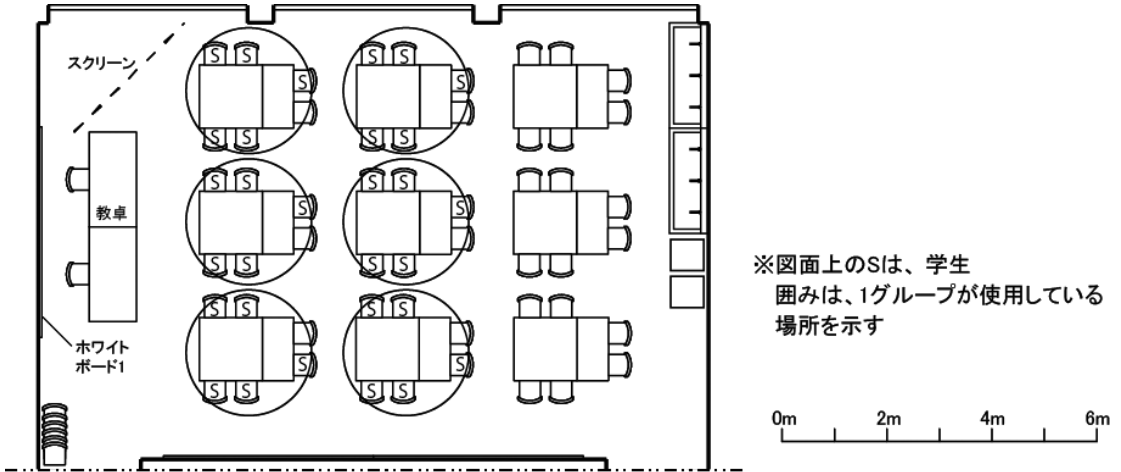


図5 授業「子どもの食生活」の空間利用状況

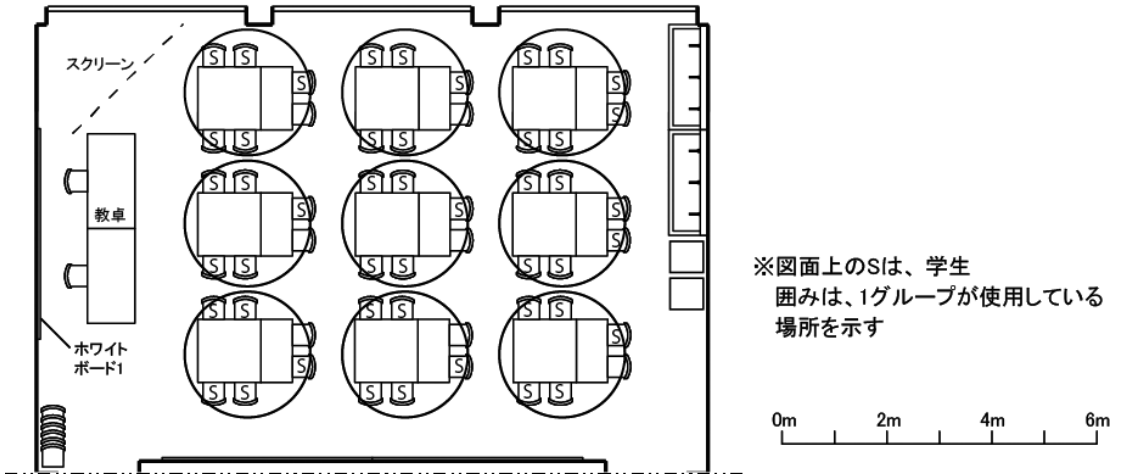


図6 授業「インターンシップリテラシー」の空間利用状況

と、うるさくなってしまうようだ。また、合同授業になると荷物置き場に荷物を置かず、手元に置いておきたい学生がほとんどで、テーブルの上が雑多な状態になってしまう。担当教員からは、「もう少し隣のチームとの間に隙間があれば良いのかもしれない。しかし、この教室の明るい雰囲気気に入っている。」というコメントを得ることができた。

【授業例4】：「キッズスペース論」
(1年生後期、講義科目、受講者数35名)

この授業では、学習環境という視点から子どもをとらえ、子どもをとりまく現状と課題を学ぶ。その中で担当教員はスクリーンを使用する際、スクリーンに背を向けて座っている学生は椅子ごと反転し、スクリーンに集中するよう働きかけをしていた(図7)。「133教室は、椅子とテーブルの

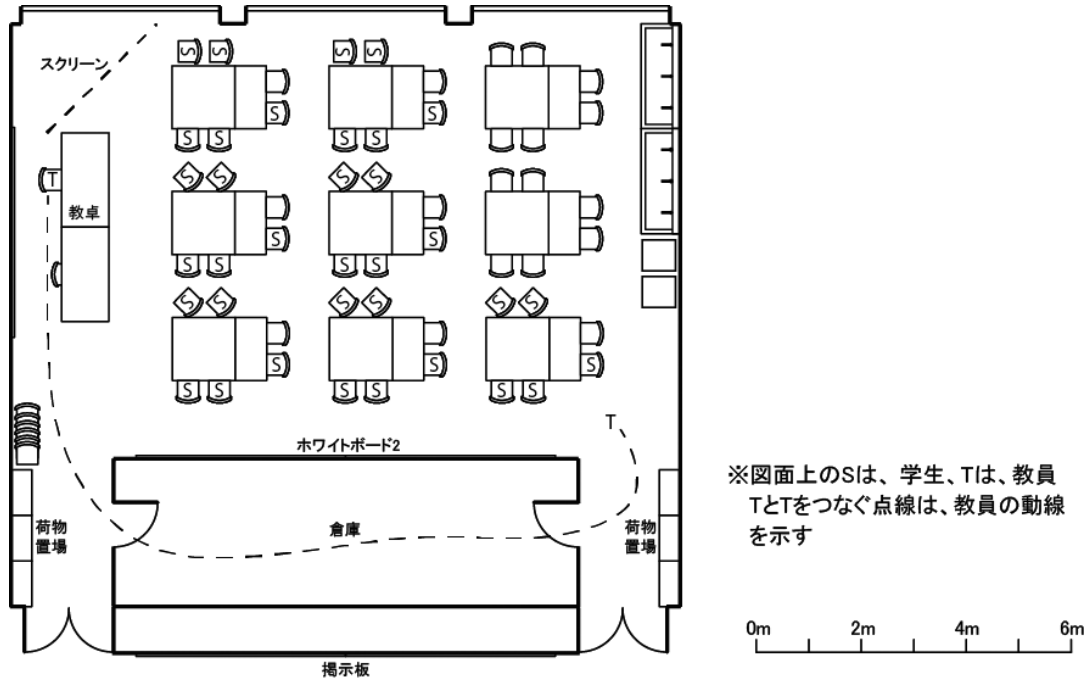


図7 授業「キッズスペース論」の空間利用状況

滑りが良いので、教員の声掛けにより、学生がスムーズに向きをかえられる。」という。また、教員が教室を自由に動き、講義の中で学生の頭の切り替えが出来るよう立ち位置を変えながら、空間を上手く使い分けている様子も見ることができた。

4. 考察

本研究では、アクティブラーニングが可能な133教室の使い方と授業運営方法の関係性を明らかにするという目的のもと、使用頻度の高い4つの授業場面における教室利用のあり方を分析した。明らかになったことを整理すると次のようになる。

● 4つの授業の共通点と相違点

《共通点》

- ・1チームは、5、6人であることが多い
- ・席やテーブルに余白があると、状況に応じて学生も教員も自由に動くことが出来る
- ・大きめの教卓は使いやすい
- ・倉庫内の材料、道具類は使いやすい
- ・明るい教室の雰囲気が良い（担当教員の声）
- ・教室のレイアウトが変えやすい、変えられる、という意識が生まれる（担当教員の声）

《相違点》

- ・席やテーブルに余裕が無い授業では、圧迫感がありおしゃべりが多くなる
- ・PC作業がある場合には、ノートPCを借りて来るパターンと、OA教室に移動するパターンがある

- ・ホワイトボード2を上手く使う授業がある
- ・スクリーンを使う際は、全員がスクリーンに注目する授業と、なかなか難しい授業がある
- ・荷物棚を利用する授業と、利用しない授業がある

そして、ワークショップに関する授業では、当初の学科の要望通りに授業を行うことが出来ていることが分かり、それ以外の授業では、それぞれの目的に応じた使われ方を見ることができた。

以上のことから、筆者が設計者として想定したことが授業の中で行われており、学習活動が活発に行われるような空間となっていることが見えたが、調査の中では、下記のような意見を聞くこともできた。

- ・PCスペースがあると良い
- ・各自の椅子の下に、荷物カゴがあると良い
- ・スクリーンが、真ん中、又は両サイドにあると良い

これらは、ある授業ではこのようになると便利ということだが、授業の状況によって必要な空間、必要な物が変わるといことが分かる。本学では、ノートPCの貸し出しや、教室変更を行うことも可能なので、それらをうまく利用している場面も見られた。

教員は、教室という空間をどのように使いこなしていくのかを考えながら、授業運営を行っていた。それを受けた学生たちの学習活動の中から見えてきたものは、4つの授業事例の中で述べてきた。特に筆者が授業担当の1人である「子どものワークショップ演習Ⅰ」の中では、教室の使い方に意味を持たせ、それが上手く学習活動と連動したときに、学生にとって意味のある活動を生み出す空間となっていたことを強く感じた。アクティブラーニングの定義に、『教室内でのグループ・

ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等を行うことでも取り入れられる。』と記載されているが、その実践には、教室という空間の影響を考慮することが重要であると考えられる。

5. これからの課題

筆者は設計者として実状を知ることができ、授業「子どものワークショップ演習Ⅰ」では、教員として利用者の1人となり、実状を見ることができた。

今回は、空間的視点からの分析であり、詳しい授業内容と空間の連動については、もう少し踏み込んでみたいと考えている。次のステップとしては、筆者が担当する授業「創作絵本の制作」で、133教室を使用した場合、どのような授業運営が出来るのかを検討し、実践すること。そのことで、設計者と教員の両方の視点から、更に見えてくるものがあると感じている。

次は、空間を通してその中で展開される学習活動が、学生にどのような影響を与えることが出来るのかも含めて、学びの場について研究していく。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省 中央教育審議会(答申)「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」平成24年8月28日)用語集より
- 2) 文部科学省 中央教育審議会(答申)「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」第四章 p9(平成24年8月28日)

多様な授業形態を設定する教室の現状とその考察

Current state of the classroom setting various forms of teaching and its consideration

Mihoko SATO

【abstract】

This paper is focused on the use of shohoku college's 133 classroom which is designed to encourage learner-centered lesson. By analyzing the hearing data of teachers who constantly use 133 classroom in lessons, it is found that how to use the classroom affects learning activities.

【key words】

active learning, learning activities, classroom